

ペランダの灰皿に、また一本。

「すまねえな」

「これだけ言つて、空を仰ぐ。」

「おお、よう来たなあ！」

「おとうさん、今日はありがとうございます」

「気になるな。俺もコイツの顔見られるんだから」

「おじいちゃん」

「ほいほい、なんか飲むか？」

「さいだー！」

「サイダーか！ようし、じゃ、おいで」

「あーい！」

「突然すいません、ご相談なんて」

「そんな頭下げんでもいいさ。美味しいか？」

「うん！」

「そうかあそうかあ。食べたものあつたら、何でも言

つていいからな」

「うん！」

「おい修平、あんまり甘えすぎなよ」

「いいんだよいいんだよ、せっかく来てくれたんだ」

「本当にすみません」

「まあ頭さげて……」

「修平、じいちゃんとお父さんは上で話してるから、待

ってるよ」

「はーい」

「じゃあ行くか」

「は、はい」

「芳子さんの体調は」

「まだ何とも。投薬治療は続けていますが、効いているか微妙らしくて」

「医者がそうだって言ってたのか？」

「ええ。薬の種類は変わっていません」

「ふた月前はもっとたくさん使ってたしな」

「症状は少し落ち着きました。痛みや倦怠感もだいぶマシになって」

「でも病気自体は治っていないんだろ」

「それは……はい」

「こういうやつの治療は、辛抱だ。これは患者本人でな

くて、取り囲む家族にこそ大事なんだよ」

「わかっていきます。けど」

「修平のことか」

「母親が家にいないんです。あの子の心の方が心配で」

「面会には連れて行っているか」

「勿論です。できる限り会うようにしてます」

「うん。ならいいが」

「でも医者からは、病状の次第によっては面会謝絶にし

ななきゃいけない場合もあると」

「このままよくなればいいがな」

「はい」

ペランダの外に、春風が流れ行く。

「修平は何年生だっけか」

「今月で二年生です」

「そうか。じゃあ、あの時と一緒か」

流れ行く、雲。

「そうですね」

ガチャン。下からだった。

「修平？」

男二人が階段を駆け下りる。

シンクに入れられた、白い皿。

隣室に眠る、男の子。

「しっかりとるな、片付けがちゃんとできるんだから」

「教えた覚え、ないんですけどね。いつの間に」

男児の腹の辺り、ブランケットが掛かる。

「昨日、夜遅くまで起きてたんです。何やってんのかな

って思ったらいいつ、手紙書いてるんです。母親に宛

てて、びつしりと文字を連ねて」

若い男の頬に、透明な一線が浮かぶ。

「大丈夫だ。大丈夫さ。こんな強い男を産んだんだ。病

も尾っぽ巻いて逃げ出す日が来るさ」

ルビー色で、うろこ雲の浮かぶ空。

「今日はありがとうございます」

「いいさ。またいつでも来い」

「ありがとうございます」

「じいちゃんはいばーい！」

「またおいでな」

茜色を反射した鋼鉄が、遠ざかる。

静寂の支配する、我が家。

駆け下りた階段を、踏みしめて登る。

自室。レコードに手を掛ける。ジーン・パオリの『猫の

唄』

「此処の景色は、変わらないよ」

胸元を弄る。よれよれの箱が顔を出す。

さらに、煙草が顔を出す。最後の一本。

燐寸を擦り、その灯を啜え煙草に近づける。

「……もう吸わないよ。もう、こいつとはおさらばすっ

から」

紫がかる空を拝む。

「だからよ、あいつらの事、頼むわ」

皺の寄った顔に、透明な一筋が浮かぶ。

ひとふかし。煙が、目に沁みた。

——筆者後記——

もう少しページを書きたかったんですが、怠け癖でべ切目を勘違いしており、こんな短い作品になってしまいました。本当に申し訳ないです。今日は新入生歓迎号への掲載作品ってことで少しだけ後記を書いてみます。

三文文士会にお越しいただき、そして部員の作品を読んでいただき有難う御座います。小田たつえです。三年生です。

・モチーフは三つありますが、その話は聞きたい人がいたらお話しします。

・この作品は別の短編集の一篇にする予定でしたが、先述の事情により、掲載させていただいた次第です。

こんな感じですかね。少なくてすいません。

じゃあ皆様。よい文芸ライフを。

二〇二〇年四月二十二日

小田たつえ